



平成 28 年度 TIA 連携プログラム探索推進事業「かけはし」 調査研究報告書(公開版)

【研究題目】

つくばに於ける研究連携の可視化と活性化を目指す「つくば連携支援ネットワーク」の構築

【整理番号】

TK16-78

【代表機関】

筑波大学

【調査研究代表者(氏名、連絡先 TEL & Mail)】

加藤英之 029-853-4543 kato.hideyuki.fp@un.tsukuba.ac.jp

【TIA 内連携機関：連携機関代表者】

KEK：池田 進

【TIA 外連携機関】

【報告書作成者】

加藤英之

【報告書作成年月日】

2017 年 4 月 3 日

【連携推進(具体的な連携推進活動内容とその活動の効果等)】

近年全国の大学で導入の進んでいる研究支援の専門職リサーチアドミニストレータ(URA)は、筑波大学及び KEK に配備されている。本調査研究では、URA が研究組織内で活動するだけでなく、組織間連携でエリア内(共同)研究活性化活動を行う事の有効性を、両者が実際に“協働”する中で調査した。

“協働”の具体的な内容は、1)つくばエリア内研究交流を狙った分野融合型・多機関参加型ワークショップを2企画実行、2)つくばエリア内研究連携を「見える化」するためのウェブ運用可能なプラットフォームの構築である。

従来のワークショップ開催で不足しがちだった点は、(a)会をシリーズとして長期に継続させること、(b)ワークショップの場で芽生え共同研究の種を育てること、(c)共同研究活性化の推進力としての外部資金獲得を支援することである。これらの不足を補うことを“アフターケア”と呼び、本調査研究で行うワークショップではアフターケアの要素を盛り込む事を主眼とした。

■ つくばエリア内研究交流を狙ったワークショップ開催(別添資料1参照)

➢ 「ICT時代の“手術”の進化」ワークショップ

後述の様につくばサイエンス・アカデミー(SAT)との議論のなかで、SATが毎年開催する「SATテクノロジー・ショーケース」で選出する優秀研究(今回は筑波大 大城氏の研究)をつくば内に広く紹介し、そこを起点とする共同研究の活性化を狙いとしました。講師・パネリストとして医学、ロボット工学、画像工学、言語処理、放射線工学から多様なメンバーを招き、SATと連携して会を実行した。つくばの各研究機関や企業から集まった観客には、講演中に随時スマートフォンで発言できるようにし、パネルディスカッションへの参加を促し、さらに、興味を持った観客はワークショップ後にオンラインで議論を続ける登録も可能とした。さらに会の後で講師の代表に対し、上記(c)の目的で、当該分野で来年度に応募可能な公的外部資金をURAがリスト化して紹介した。

➢ ドームを「着る」未来の暮らし Tsukuba Future Dome Symposium

講師を筑波大・農学、筑波大・芸術、JAXA、東大・農学&ICTから招き、上述のワークショップより少ない人数構成で密な議論の出来る設定とし、講師の多様な専門性を軸とし

て次世代の服 = ドームのあらゆる可能性を議論した。会費制で軽食・飲み物を用意し、交流の時間をふんだんに設けて観客を含めた広範な研究交流を促した。

■ つくばエリア内研究連携見える化ウェブプラットフォームの作成（別添資料2参照）

- エリア内に無数に存在する「研究会」「勉強会」などの研究連携コミュニティの情報を一カ所のウェブページで一覧出来るようにするため、ユーザーが自由に検索可能でコミュニティのセミナー情報を発信出来るプラットフォームを開発した。約300のコミュニティ情報を調べ上げ、データベースを構築した。
- 本プラットフォームは、つくばエリアの全研究機関がユーザーとなる物であるため、その維持運用はどの研究機関にも属さない中立的機関が行うのが適切との考えに基づき、中立的機関と運用体制の具体的な構築の議論を進めている。

【調査研究内容（実験等中心に背景・課題と実行された課題解決の内容と結果）】

本調査研究は、つくばエリアにおける研究連携の活性化を目指して新しいスタイルのワークショップ及び「見える化ウェブページ構築」を行うものである。本調査研究を進めるに当たっては、同じ目的でつくばエリア内の研究連携活性化に長きにわたり尽力してきた「つくばサイエンス・アカデミー(SAT)」及び「筑波研究学園都市交流協議会(筑協)」と繰り返し議論を行い、有効な協働を検討し、可能なときには協業を実行した。以下その内容を述べる。

■ ワークショップ開催

➢ 「ICT時代の“手術”の進化」ワークショップ

2017/1/28 13:00-17:00 に筑波大で行った本ワークショップは筑波大、KEK、産総研、JAXA、製薬会社、筑波銀行、つくば市、常陽新聞などから参加者39名を数えた。7名の講師による講演セッション(第1部)で基礎知識を獲得した後、アイデア拡大セッション(第2部)で、この分野の広がりについて観客を含めた活発な議論を行った。観客がスマートフォンで随時発言できるシステムは人気を博し有効に利用された。ワークショップ後の継続オンライン議論(上述)には登録者がなく、今後の検討材料とした。「ICT時代の手術という共通のトピックについて色々な側面から見ていけたことがすごく興味深かった」との感想が寄せられ、「ワークショップで有益な出会いがあったか?」に対して回答した全員が「有った」と回答した。URAによる当該分野の公的研究資金の紹介(上述)に対して、研究資金応募を具体的に進めるとの反応があり、「アフターケア」の有用性が認められた。

➢ ドームを「着る」未来の暮らし Tsukuba Future Dome Symposium

本企画では筑波大、KEKに加え、機関間連携をミッションとして持つJAXAも協力した連携企画となった。ミーティングは2017/3/8 18:00-20:00につくば国際会議場で行い、筑波大、KEK、JAXAに加えて防災研、農研機構、NIMS、慶応大などつくばエリア内外の様々な研究機関及び近隣企業から参加者25名を集めた。この種の会の有益な点について、アンケートの回答者からは「視野を広げた」という回答が最も多く、「人脈づくり」という回答が次点だった。一方で、「言葉・流儀が理解にくい」「未知分野のため世界の中の位置づけが不明」との意見も聞かれ、今後の課題と位置づけた。

■ ウェブプラットフォームの構築

➢ ニーズ調査

ウェブプラットフォームのニーズに関しては、SATとの議論の中で、つくばで長らく研究を続けてきた多くの方々の意見として「そういうものが是非欲しかった」というものがあった。また、つくばエリアに赴任して間もない研究者からヒアリングを行ったところ、「つくばエリア内での研究連携に興味があるが、連携の糸口を見つけるのが必ずしも簡単でない」という声が多く、ウェブプラットフォームの必要性・有用性が示唆された。

➢ ウェブプラットフォームの仕様決定

様々な研究者、研究支援者の声を参考にしつつ、全研究コミュニティを、生命、理工、人社、複合への大分野と“つなぐ”(連携を活性化する団体)というカテゴリーに分け、

細目分野、キーワードで検索できる仕様とした。各研究コミュニティの情報としては、活動内容、キーワード、活動場所、活動頻度、連絡先などが閲覧でき、さらにそのコミュニティが行うセミナー、講演会の情報などが掲示できる。さらに、一つのコミュニティがどのコミュニティと繋がりが深いかの情報も含めている。

➤ 研究コミュニティ調査

多数のコミュニティの登録を促すために、つくばエリアにあるあらゆるコミュニティの情報（上記）をウェブで調べたところ、300あまりのコミュニティが見つかった。

➤ 長期的運営体制の設計

前述の様に中立的機関がこのプラットフォームを継続的に運営するための仕組みを、現在までに詳細に検討を進めてきた。プラットフォームを実際に運用する準備として、利用者規定案なども練り上げた。

【今後の予定】

■ ワークショップ開催

➤ H28年度に2度開催したワークショップのノウハウに基づき、H29年度もワークショップを開催し、TIA研究課題の創出に繋がるつくばエリア内の共同研究の活性化を行いたい。

■ ウェブプラットフォーム

➤ 本調査研究で完成したプラットフォームは300以上の研究コミュニティの情報を既を含んでいるが、各コミュニティについて公開可の確認が取れたものから順次公開をしていくことで、ウェブサービスとして始動する。ウェブサービスとしての使い勝手などについてノウハウを蓄積する。一方で、上述の中立的機関との運営体制の議論を続け、H29年度中にその合意した運営体制を発効させる予定で作業を進める。

以上。